
バカと真面目と召喚獣

いいですとも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと真面目と召喚獣

【Nコード】

N2045Y

【作者名】

いいですとも

【あらすじ】

文月学園の生徒である金城香奈は、体調不良でFクラスになってしまった！？

友達思いな香奈は、仲の良いバカな友人達が起こす騒動に巻き込まれる！

香奈は平穏な学園生活を過ごすことが出来るのか！

坂道と桜並木とプロローグ（前書き）

読んでくださる皆様、見苦しいかもしれませんが、どうぞよろしく
お願いします！

坂道と桜並木とプロローグ

校舎へと繋がる坂道

その両脇を彩る春を感じさせる桜

初めて見た者なら誰もが足を止め、そして嘆息するだろう

その坂道を、息を切らしながら、全速力で駆け上っていく少女がいた

彼女は特に目立つところはなく、しかしとても整った容姿をしていた

彼女の名は金城香奈

香奈は、坂道を登った先にある学校の生徒である

文月学園

それは坂道を登った先にある、とても特殊な学校だ

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園

それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い

そんな学校に通う香奈は、坂道を登りきり、校門の前に立つ教師に挨拶をする

「西村先生、おはようございます。すみません、遅れました」

「ふむ、金城が遅刻とは珍しいな。何かあったか？」

「家に筆記用具を忘れてしまいました…」

「なるほど。次からは忘れ物をしないようにな。」

「はい！」

会話から分かるように、香奈は教師から信頼されているようだ。

「あ、西村先生！おっはようございまーす！」

「遅刻だ馬鹿者」

…後ろの学園一のバカと違つて

「吉井、遅刻だよ…」

「あれ、金城？金城が遅刻するなんて珍しいなあ」

「うん、今日はちよつとね…」「ふうん…」明久と香奈は一年の時から交流があり、とても仲が良い

その為か、吉井の成績は昔より良くなっている

「ほら、二人共受け取れ」

そう言つて西村が差し出したのは、二つの茶封筒

「ああ、僕は大丈夫ですよ！どうせFクラスでしたし！」

「そんなことないよ…巻き込んだじゃつてごめんね…」

香奈はクラス分けの試験の日、体調が悪く途中で倒れてしまった
明久は倒れた香奈を保健室に連れて行く為途中退室。結果二人は全
教科0点になりFクラス入りが確定となつてしまった

「謝らないでよ、自分の意志でやつたんだから」

「でも、今の吉井ならきつとDクラスには…」

「そんなの過大評価だし自分の意志でやつたつて言ってるじゃん！
金城だつて前日に、僕に勉強を教えてなきゃCクラスにイケたかも
しないんだから！」

「そんな…」

「金城だつて僕を責めないでしょ！？僕も金城を責めない！だから、

金城も自分を責めないで！」

「うん…分かった！」

明久はとても優しい男だ。だから人が寄ってくる

明久はとても強い男だ。だから意志が固い

明久はとても弱い男だ。だから人の気持ち分かる

バカだが、こんな明久だからこそ、香奈を励ますことが出来たのだ

「二人共遅刻だ！走って教室まで行け！」

西村の声が響く

『はい！』

二人の重なった声が響く

二人が消えた校舎を見ながら西村が呟く

「頑張れよ、二人共…」

西村の小さな声は、春の微風にかき消された

坂道と桜並木とプロローグ（後書き）

楽しんで頂けましたか？

出来れば感想よろしくお願いします！

批判も受け付けています！

これからもどうぞよろしくお願いします！

バカと仲間とFクラス（前書き）

すみません、島田アンチです…

バカと仲間とFクラス

「うわ…。これが教室…？」

「凄いねえ…」

二人は思わず足を止める

それもそのはず、彼らが見ているのはAクラスだ
Aクラスは設備が充実していて、教室というより、ホテルという方がしっくりくるぐらいである

目眩を覚える程の教室だ

「あれはシステムデスク…。あれは個人クーラー…」

「吉井、あれつてもしかして冷蔵庫…？」

「もしかしなくても冷蔵庫だよ…」

「しかもあの人たち…。あれを当然の様に扱ってる…」

「仕方がないよ…。社会じゃ、成績が全てなんだし…」

「…もう行こ！なんか気分悪くなってきた！」

「だね」

返事をしながら明久は、思わず苦笑いを浮かべていた

「うわ…。これが教室…？」

「凄いねえ…」

思わず、先程と同じ言葉を吐いてしまっくらい衝撃的な教室がそこにはあった

それもそのはず、彼らが見ているのはFクラスだ
思わず目を覆いたくなるほど汚い外観

さらに少し異臭がする

違う意味で目眩を覚える程の教室だ

「なんか違う意味で気分悪い！」

「もういいや…。さっさと入ろう？」

「うん」

そして明久は異臭のする戸を開ける

「すみません、遅れちゃいました」

「ん？明久。お前Fクラスなのか？」

「あれ、雄二？雄二もFクラスなの？」

「おうそうだ。点数をちょっと調整してな。俺はこのFクラスの代表だ。」

「へえ、そうなんだ。」

明久の後ろから、ひょいと出てきた香奈が口を挟む

「坂本…何が目的？」

「うお！金城！？なんでここに！」「Fクラスだからだよ…。ちょっと体調が悪くてね…。それで明久も…」

「ああ分かった…それ以上言わなくて良い」

「うん…」

雄二は何があつたかを察し、香奈にそれ以上を言わせなかった

「それはそうとして。本当になんでFクラスに。しかも面倒くさそうな代表に。」

明久の問いに雄二は口元を釣り上げる

「そりゃあ代表って言ったら、一つしかないだろ」

「やるの？坂本。試験召喚戦争を」

「ああ勿論だ！」

試験召喚戦争。通称、試召戦争

試召戦争とは要するに、設備を賭けた、成績で戦う成績である上位クラスが下位クラスに負ければ、設備を入れ替えることになる
また、下位クラスが上位クラスに負ければ設備を一段階落とされることになる生徒たちはより良い設備を求め、成績を向上する
それが文月学園の試召戦争の目的である

「まあそれは後で聞くよ。雄二、席は決められてるの？」

「いや、自由席だ」

「じゃあ吉井！あっちに座ろっ」

「はいはい」

「さて、じゃあ俺もそろそろ座るかな。明久、隣良いか？」

「良いよー」

「いや金城が答えないでよ。別に良いけど」

三人が席についてすぐに、教室の戸が開いた

「えー、おはようございます。Fクラスの担任を務めます…」

担任らしい教師は、薄汚れた黒板に視線をやり手を伸ばそうとして
…視線を皆の方に戻した。

「福原慎です。よろしくお願いします」

その光景を見て明久たちは驚愕する

「おいおい、チョークすらないのかよ」

「ここまで酷いとは…」

「諦めるしかないよ…」

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば、申し出てください」

「むしろ不備しかないだろ…」「しっ！」

「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れてます」「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

「学校の悪意が見えるよ…」

「ここまで差別されるとなんかな…」

「気持ち悪い…」

この学校の圧倒的な学歴主義に香奈は嫌悪感を催す

「では必要なものがあつたら、極力自分で調達する様にしてください。それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

福原の言つとおり、廊下側の一番最後に座っている生徒が立ち上がった

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してゐる。今年一年、よろしく頼むぞい」

「あ、秀吉だ」

「こいつも使えそうだな」

「坂本…凄く悪そうな顔してるよ…」

秀吉は男とは思えない程の可憐な姿をしている
秀吉も一年の時から明久たちと交流があり仲が良い

「……土屋康太」

康太は全体的な成績は悪いが、保健だけは他者の追隨を許さず、保健の成績は学年で一位を欲しいままにしている
彼もまた、一年の時から明久たちと仲が良い

「ムツツリー二もだ…」

「こいつもまた…」

「坂本…」

「でもやっぱり女子がいないねえ」

「もしかして、女子は私一人…？」

「おい、ちょっと待て。次は女子みただぞ」

「……です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

とある女子は一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

「し、島田さん…」

彼女の名前は島田美波

一年の時から明久たちと交流があり仲が良い
ある一名を除いて…

「ハロー」

「ははっ…」

明久は不吉な言葉に背筋を凍らせていた
隣で雄二は苦笑い

そして香奈は怒りに震えていた

そして香奈の出番が回ってきた

「金城香奈です。趣味は色々、特技も色々。嫌いなことは差別、嫌いな物は爬虫類、嫌いな者は暴力を振るう人です。」

香奈は美波を睨みながら、そう言い放った

バカと仲間とFクラス（後書き）

これからも頑張りますので、よろしくお願いします！

嫌悪と偽悪者と学年次席（前書き）

香奈だけじゃ力不足だと思い、オリキャラを一人増やしました！

結果、オリキャラ無双になってしまいました…

反省しています…

嫌悪と偽悪者と学年次席

睨まれた美波は、香奈に憎しみの籠もった眼で睨み返した
二人の間に流れる不穏な空気に、Fクラスは静まりかえる

香奈と美波はお互いの存在を快く思っていない

美波は、いつも明久の近くにいる異性である香奈を、恨めしく、妬
ましく思っている

香奈は、大事な友人である明久に、いつも理不尽な暴力を振るう美
波を、ただひたすら嫌悪していた

この空気を変えたい明久は、二人の間に割って入る

「ほらほら二人とも！僕が自己紹介するからちゃんと聞いて！」

明久に言われ、二人は渋々視線を他に移す

しかし、睨み合いが終わったからといって、クラスの空気が変わる
わけではない

空気を変えようと必死な明久は、軽く咳払いをし、練りにねって考
えた渾身の自己紹介をする

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださ
いね」

そう、渾身の自己紹介だ

『……………』

効果があるとは限らないが…

「うつう…」

「頑張ったな、明久…」

「私が呼んであげるからそれで我慢して、ダーリン」

「そういうことじゃないんだ…。そういうことじゃないんだよ…」

どうしてあんな自己紹介をしたのか、良く分かっていない香奈だった

そのとき突然戸が開き、少し高めの男の声が響いた

「すみません」遅れちゃいました」

声を発した男は、背が少し低めで、これといった特徴のない黒髪と、いかにも普通の男子高校生であった

彼の微かにだが放つ、異様な空気を除いては…

「ああちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、端梨くんもお願いします」

「分かりました」僕の名前は端梨人巻と言います！僕は自分のことを、素直で純粋な人間だと自負しています！これから一年、同じクラスで頑張しましょう！みなさん、よろしくお願いします」

人巻は言い終えると、誰の反応も待たず、明久の席の前まで歩き、そして座った

「やあダーリン」

「聞こえてたの！？」

「うん」

「はあ…。それよりさっきの自己紹介、何が素直で純粋な人間だよ。全然違うじゃないか」

「そうかな？僕は自分のことを、素直で純粋に嘘を吐く人間だと自

負しているよ」

思わず明久は溜め息を吐く

「そんなことより人巻。なんでお前がFクラスなんだよ。お前ならBくらいに行けたろ」

「それは君もだろ？雄二くん。僕の場合はちょっと暇だったんでね。面白い人たちが居そうだからっていう理由しかないよ。明久ちゃんたちがFクラスなのは分かってたしね。同じ教室でテストを受けてたから」

「なるほど、お前らしい」

「だろ？僕のモットーは名前の通り、『恥も無く人を巻き込む』だからね」

「親はそういう意味で名前を付けたんじゃないと思うんだけど！」

「あははっ」そうだね、金城さんの言うとおり！」

「もうっ！」

香奈の反応を見て、人巻は笑い声を上げる

明久たちもつられて笑い始める

人巻は一通り笑い終えたようで、一息を入れてからまた口を開く

「そういえばさっき、珍しい人が遅刻してるのを見たぜ。まあ、僕も一応急いでいたから、走って抜かしちゃったんだけど」

「ふーん。その子って誰？」

「えーつとねえ」

人巻が名前を言おうとしたその時、戸が開いた
そして、桃色の長い髪をなびかせた女子生徒が、息を切らしながら入ってきた

「ほら、あの子だよ」

その姿に、大半の生徒が、驚きを通り過ぎて声が出ない様な状況に陥っていた

「え…。あの子ってまさか姫路さん!？」

明久が驚きの声を上げる

「え、よ、吉井くん!？」

姫路と呼ばれた女子生徒も、驚きの声を上げる

「違うよ、ダーリンだよ!」

人巻は余計な茶々を入れる

「人巻は余計なことを言わないで!」

至極真つ当なツツコミである

「ああちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

「凄いな。人巻のときと名前のところ以外、一語一句同じだよ…」

「作者が楽しただけでしょ?」

「メタ発言は止めて」

「その発言もメタ発言だけだな」

「三人とも!」

『はい…』

声を荒げて話し合う四人
実に迷惑である

「あの…、もう良いですか…?」

「はい！大丈夫です！」

「ええと、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

「先生！イジメは良くないと思います！」

『違うから！！』

傍から見れば人巻の言うとおり、イジメを予感させる質問ではあったが、ほぼ全員がそう思っていた事だった

瑞希は容姿も人目を引く程で、テストでは一桁の順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった

「わたしは振り分け試験中に熱を出しちゃって…」

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「分かるかい明久ちゃん。僕らはこいつらと同レベルなんだぜ」

「悲しいこと言わないでよ…」

明久たちは無性にやるせなくなった

「で、ではっ、今年一年よろしくお願いします！」

瑞希は逃げるように、香奈の前の席に着いた

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしまっ

「き、緊張しましたあ…」

「大丈夫？姫路さん」

「よ、吉井くん！だ、大丈夫、です！」

「そっか！良かった♪」

そして明久は瑞希に微笑みかける

ここまで天然たらしという言葉が合う人物は、他にいるだろうか
思わず瑞希は吐息を漏らす

「流石だね、明久ちゃん！そこにシビレる！憧れるう！」

「何が！？」

「吉井ってやつぱり凄いね…。やり過ぎないようにね？後ろから刺
されちゃうよ？」

「なんで！？」

「本当に気づいてないんだな…」

「何に！？」

瑞希を交えて五人で騒いでいると、前の方から何かを叩く音がした

「はいはい。その人たち、静かに」

福原が注意を始めるが、叩いた教卓が音を立てて崩れてしまった

「してください…ね？」

本人としては、軽く叩いたつもりだろう

しかし、壊してしまった事実は変わらない為、少々気まずそうな顔をする

「えー。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

福原は気まずい顔をしながら、教室を後にする

「…ねえ、雄二。ちよつと良い？」

「別に構わないぞ」

「じゃあちよつと外で」

「真剣な話か？」

「うん」

「分かった」

「何？愛の告白？」

人巻の適当な戯れ言をスルーし、二人は真剣な面持ちで教室を後にした

嫌悪と偽悪者と学年次席（後書き）

見苦しかったかもしれませんが、これからもよろしくお願いします！

意地とFクラスと試召戦争（前書き）

感想をくださった方々ありがとうございます！

これからも精進していくのでよろしく願います！

不快になる内容が入っていますが、読んでいただければ嬉しいです

…

意地とFクラスと試召戦争

「それで、話してなんだ？明久」

「うん。さつき、試召戦争の話をしたじゃない？」

「ああ」

「目標をAクラスに変えて欲しいんだ」

明久の発言に雄二は目を細める

「…まゝた誰かの為か？」

「そついう訳じゃないんだけど…」

雄二の発言に明久は目を泳がせる

「嘔吐くな。じゃなきゃお前が試召戦争なんて言い出す訳がないだろ」

「いや、本当だよ！FクラスとAクラスの教室を見たらさ！」

「さつさと理由を話せ。金城も姫路もここにはいねえよ」

「どうして分かったの…？」

「顔に出るんだよ。お前は」

「そうなんだ…」

明久が一人納得していると、雄二がさつさとしろと急かし始めるので、明久は理由を話し始める

「姫路さんって体が弱いじゃない？だからこんな環境の悪いところじゃ、体調を崩しちゃうかもしれないし…しかも、元々Aクラスに行ける実力があるのにこんなんじゃない可哀想でしょ？」

「ああ、確かにそうだな。で、どうして金城の為なんだ？」

そっちが本題と言わんばかりの口調で、明久に尋ねる
それは仕方がないだろう。明久が、どうして姫路の為に頑張るかは
想像がついていたからだ

雄二の問いに、明久は口を開いていく

「金城がさ、Aクラスの人たちを見て不機嫌になってたんだよ…」

「ほう？それはどうしてだかお前には分かるか？」

「…多分だけど良い？」

「ああ勿論だ。聞かせてみる」

「えっとさ…、Aクラスの人たちってAクラスの教室を勉強で勝ち
取ったんだよね…？」

「ああそうだな」

「でもさ、世の中勉強が全てじゃないでしょ…？運動を頑張る人も
いれば、秀吉みたいに演劇を頑張る人もいる…」

「……」

「けどこの学校は、勉強だけで教室の設備を決められて他の努力
を認められない…。そしてAクラスの人たちはその設備を当然の様
に使っている…。そこに腹が立ったんじゃないかな…」

「要するに、他の人も色々と努力をしているのにそれを認めず、勉
強だけが全てだと信じているAクラスの奴らとこの学校に腹を立て
てるってことか？」

「…多分ね」

「それは詭弁だな。そう思っている人も少しはいるかも知れないが、
全員がそう思ってる訳ではあるまい。僕はそう思うね」

いきなり現れた人巻がそう言った

「お前、いつからそこにいた…」

「だが金城さんの意見にも一理ある。そう思われるほどAクラスの人たちの態度は大きかった。僕がさっき見たときなんて、優雅にカップで紅茶を飲んでたぜ」

「聞けよ！」

「ん、なんだい？」

「…はあ、もういい。安心しろ明久。俺の狙いは最初からAクラスだ」

「へ？EクラスとかDクラスじゃないの？」

「ああ、目的はお前と一緒にだ。学力だけが全てじゃないってことを証明したくてな」

雄二が口の端を吊り上げる

「証明したいなら論文でも書けば？」

人巻も口の端を吊り上げる

「はいはい、人巻も人を煽らない」

「僕の生き甲斐を奪わないで！」

「嫌な生き甲斐だな…。話しも終わったし二人とも、中にはいるぞ」

そして三人は教室の中へと入っていった

「三人とも遅かったね。何してたの？」

香奈が不安そうに三人に尋ねる

「ああそれはね、パンツの話しをしてたんだ」

「へ？」

思わず香奈は間の抜けた声を出す

「ちよっ！人巻！勘違いされる様なこと言わないでよ！」

「僕たちはこれでも男子高校生だからね。パンツに夢中なんだよ。やっぱり時代はパンツだね。口に出すだけで興奮するよ。パンツだって他の服と同じでただの布なのに、どうしてあんなに興奮するんだろうね？人類の永遠の謎だよ。この謎が解けたなら或いは、世界中の戦争がなくなるかもしれないね。やっぱりパンツは凄いね。Yesパンツ！おっと話しが逸れたね。『どんな話しをしてたか』だよね。主に話してたのはパンツの色の話しかな？どの色もそれぞれの魅力とエロスが宿っているよね。十人十色とは正にこのこと。これからは十人十色ではなく、十パンツ十色にするべきだね。そっちの方が絶対に意味が通じやすいもの。おっと、また話しが逸れてしまったね。いやぁ失敬失敬。パンツの話しを始めると我を忘れちゃうんだ。饒舌にもなるね。そう、色の話しだったね。明久ちゃんと雄二くんは、白に一番魅力を感じるみたいだよ。うん、その気持ち凄く分かるよ。白は凄く清楚な感じがするよね。汚れなき乙女って感じだよ。そしてその汚れないものを自分色に染める。そそのね。唾液が湯水のように溢れ出てくるよ。だけど僕はやっぱり黒が良いな。何？とてもエロい感じがするって？バカやろう！フザケたことを抜かすなよ、このド三流が！！エロそうな人が身に着ければ確かにエロく見えるさ。だけどエロくなさそうな人間が身に着ければ黒もまた清純な色となる！このエロスと清純の二刀流。完璧じゃないか……。だがパンツには……」

『なげえよ！！！！』

明久と雄二の絶叫が、Fクラスに響いた

「おいおい、あまり大声を出すなよ。周りに失礼だろ？」

「ずっとパンツの話しを聞かされる方の身にもなれ！！」

「…あなるほど、アソコがハイパーフルバーストということか」

「違うわ！」

「吉井、本当にパンツの話しをしてたの…？」

「人巻の嘘に決まってるでしょ！！？」

「ウルサイですよ、皆さん」

いつの間にかに帰ってきていた福原に怒られ、教室はまた静かになり自己紹介が再開した

自己紹介は順調に進んでいき、最後の雄二の番になった

「えーと、坂本君、君が最後ですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください」

「了解」

そう言い雄二は立ち上がり教卓の前に向かった

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そしてここで雄二は一つ咳払いをし、声の調子を調える

「Aクラスは超豪華待遇らしいが……不満はないか？」

『大ありじゃああああ！！！！』

Fクラス全員が叫び、教室に声が響きわたる

確かにここまでの差だと、不満がない方がおかしいだろう

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ」

「いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！」

「Aクラスだって同じ学費だろ！？」

「女子高生のパンツがみたい！！」

「改善を要求する！！」

「ああ、そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

こうして戦いの火蓋は切って落とされた

意地とFクラスと試召戦争（後書き）

不快になってしまった方、本当に申し訳ありません…
自分勝手ですが、これからも読んでいただければ嬉しいです…

バカと理由とDクラス（前書き）

遅くなってすみません…

少し書き方を変えました

バカと理由とDクラス

「勝てるわけがない」

「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

「姫路さんがいたら何もいらなない」

「そんなことよりパンツだ！　パンツが最優先だ！」

「人巻はちよつと黙ってて」

否定的な意見（変態発言も有り）で教室が満たされている中、雄二は余裕の笑みを浮かべている

やはり何か策があるのか。流石は元神童と明久は感心する

対して人巻も余裕の笑みを浮かべている

パンツのことでも考えているのか。流石は現変態と明久はある意味感心する

ある種、人巻はムツツリー二より、鼻血を出さない分危険かもしれない、と明久は実感する

「そんな事はない、必ず勝てが勝たせて見せる」

「何を根拠に」と、また否定的な意見が上がる

しかし雄二は話を続ける

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は辺りを見渡し、屈んでいるムツツリー二に目を向け、言葉を発する

正直明久は雄二の言葉より、何故ムツリーニは屈んでいるのかの方が気になっていた

「おい康太、いつまで姫路のパンツを覗いているんだ？」

「ふえ！？」

「ちよつ！？ おまつ、パンツ覗いてたのか！」

ちよつとそこどけ！ 僕が覗く！…って、ああああ！ 姫路さんパンツを隠さないで！ お願いします！ どうか僕に慈悲を！！」

姫路は顔を真っ赤にしながらパンツを隠している

人巻は姫路に必死にパンツの素晴らしさを語って聞かせる

とてつもなく悲しい光景だった

明久は誓う。自分はあるにはならぬようにしようと

「ていうか康太、いつまで首を振っているんだ」

明久は、人巻達に氣をとられていた為気付いていなかったが、康太はずっと首を振っていたらしい
疲れないのだろうか

「……そんな事実は確認されていない」

「一人だけパンツを確認しやがって…」

パンツを見ることを諦めた人巻は毒づく

「……なんのことやら」

ムツリーニはそっぽを向く

「はあ…。そんなことどうでも良い。土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性職者だ」
ムツリーニ

雄二の言葉に周りはざわめき、ムツリーニは、また首を振り始めた

「馬鹿な…奴がそうかどうか？」

「見る！ まだ証拠を隠そうとしているぞ…」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「吉井…前から思ってたけど、ムツツリーニって酷いあだ名だね…」

「あはは…まあね。でも、ムツツリーニはそれだけのことしてるし…」

「ね…」

「僕この前のテストで、『ムツツリーニ』の筈なのに、『ムツツリーニ』って書きちゃったよ」

「あはは！ 吉井らしいね！」

「どういうことだよ！」

「そのままの意味だよ！」

「むう…」

「おい明久！ 金城！ 一応俺の話を聞け！」

「ああごめん雄二。続けて」

雄二は咳払いをし、声の調子を調え話を戻す

「みんなも姫路の实力は知っているだろう。」

姫路、お前はうちの主戦力だ。期待してるぞ」

「は、はい！ 頑張ります！」

「ああそうだ。うちには姫路さんがいるんだ」

「そうだな。姫路さんがいれば何もいらない」

「また何か言ってる人がいるね…」

「無視が一番だよ」

「端梨人巻。いつもはふざけたことしか言っていないこいつだが、案外成績が良い。」

「大体Bクラス並だよな？」

「ああ、そうだぜ」

「お前もうちの主戦力だ。よろしく頼むぞ」

「良いぜ、坂本くん。試召戦争で活躍すれば、『キヤー端梨くん素敵！ 私のパンツあげる！！』って展開になるかもしれないしね」

「悪いがそれは無いと思うぞ…？」

「ガーン…」

フザケて人巻は、落ち込むフリをする

雄二はそれを笑って受け流し、話を続ける

「木下秀吉。演劇部のホープで、あの木下優子の双子の弟だ」

「おお…あの木下優子の…」

「姉妹揃って可愛いぜ…」

「…姉妹って聞こえたんだけど…」

「放っておこうよ…」

「あ、そうだ。秀吉ちゃん、やっぱり優子ちゃんはAクラス？」

「ああ、Aクラスじゃったぞ」

「あれ？ 人巻と木下さんって知り合いなの？」

「ああそうだぜ。優子ちゃんの所為で僕はパンツ愛好家になっちゃったんだ。」

その時の話、長くなるけど聞きたい？」

「いや、別にいいよ……」

明久は本当に長くなりそうだったので、遠慮をした

「話を戻すぞ」

「ああ坂本、ごめん……」

「問題ない。話を戻すが、勿論俺も本気を出す！」

「そう言えば坂本って昔、神童って言われてたよな！」

「じゃあAクラス並が二人もいるってことか！」

「坂本は………無理だな……」

「さつきから危ないことを言ってる人がいるけど……」

「さつきから言ってるけど触れないであげて」

「金城香奈。お前も重要な戦力だ」

「えええええ！？私はみんなみたいに凄い能力を持ってないよ！？」

「だが全てにおいて平均以上だ。弱点がないって言うのはとても重要なことだ。よろしく頼むぞ」

「……………分かった」

「確かに結構可愛いな」

「彼女も良いな……じゅるり……」

「吉井……寒気がする」

「あはは……よしよし」

そう言い明久は金城の頭を撫でる

その瞬間、明久は背筋が凍るような殺気を感じた

その殺気を感じる方を向くと、そこには自分と金城を睨みつける島田がいた

金城も殺気を感じたのか島田の方を向く
まさに一触即発。そんな空気が二人の間に流れた

その時、教壇の方から大きな音がした
教壇の方を見ると、雄二は黒板に拳を置いている。

恐らく先程の大きな音は雄二が黒板を叩いた音だろう
密かに雄二に感謝する

「さて、今からこの試召戦争で一番のキーマンを紹介しよう」

雄二は自信満々に、そう言い放った

明久にはキーマンが誰なのか、まったく検討がつかなかった
姫路さんでもなく、雄二、人巻でもない。ならば誰がキーマンなの
だろうと明久はひたすら疑問に思った
恐らく他のみんなもそうだろう

雄二は周りを見渡して、そのキーマンの名前を言った

「明久、お前だ」

「……………へ？」

みんなが頭に疑問符を浮かべる中、金城は一人納得がいったようで、
仕切りに頷いていた

バカと理由とDクラス（後書き）

金城エ
…

全然目立たせられない…

明久と人巻と宣戦布告（前書き）

島田と秀吉とムツツリー二の順番が…

明久と人巻と宣戦布告

「えっ！　ちよっ、なんで僕！？」

雄二の発言に明久慌てふためきおののいた。

自分を過小評価しがちな明久は、何故自分がキーマンになりえるのか全く分らないのだ。

「金城も頷いてないで何か言ってよ！！」

「？　坂本は何も間違ったことを言ってないよ？」

明久は考える。何故二人が手放しに自分のことを持ち上げるのかと。

（僕を持ち上げた後に貶して、辱めるつもりだな！！）

明久が出した答えは卑屈なものだった。

この答えに達した明久は、そうはさせまいと素早く行動に移る。

「ふっ…残念だったね二人共…。僕はその手には乗らないさ…」

雄二と金城からしてみたら意味が分からない。

雄二は、確かに他人を褒めること自体が珍しい為仕方ないかもしれないが、金城は良く他人を褒めるのだ。完全にとばっちりである。

「みんな！　僕はみんなに期待される様な人間じゃない！

何故なら僕は………観察処分者なんだっ！！！」

その言葉にFクラスは静まりかえる。

そんな中、姫路が声をあげた

「あの…観察処分者ってなんですか…？」

「ん？ ああ、姫路には全く関係ないことだし、知らないのも仕方がないな。」

「良いか？ 観察処分者っていうのは、学園でも類を見ない問題児に与えられる称号だ」

「言い過ぎだぞ雄二！！」

「仕方がないよ吉井…。あんなことをやったんだし…」

その言葉に明久も口を閉じる。明久が黙ったので、雄二に引き続き金城が説明を続ける。

「続けるね姫路さん。」

観察処分者にはある特権があるの。それはね召喚獣で人や物に触ることが出来るの」

「それって凄いいじゃないですかっ！！」

姫路の反応に、どこからともなく現れた人巻が言葉を返す。

「そうだね！ 召喚獣の力を利用してスカートをめくったり、パンツを奪い取ったり…」

「僕はそんなことしないよ！！」

「そりゃあそうだ！ 僕だって嫌だぜ！ 無理やり見たり奪ったりしたパンツは！

さり気なく見えたりするのは良いよね！ 相手から見せてくれたりしたら神の領域だぜ！！

ヤバイ、また話がズレちまった…

まあ本題に戻すけど、そんな観察処分者にも勿論デメリットはあるんだぜ」

「……それはなんですか？」

緊張した面持ちで質問する姫路に、明久は微かに笑みを見せながら答えを返す。

「それはフィードバックだよ」「ま、要するに明久の召喚獣が攻撃を受けたら、明久自信にも痛みが来るって訳だ」

それなら一人戦えない奴がいるようなものじゃないかと、Fクラスの生徒たちは不満を漏らす。

明久もその不満に同意見だった。しかし雄二は否定する。明久はキーマンになりえると。

「明久は観察処分者だ。そして観察処分者は、召喚獣を用いて教師の手伝いをさせられる。それ故に、観察処分者は召喚獣を使う回数
が他の奴らに比べ圧倒的に多い」

「要するに何が言いたいんだ？」

須川が質問をするが、それに雄二は溜め息を漏らす。まだ意味が分からないのかと。

雄二が答えないので金城が代わりに答える。

「要するに、他の人より召喚獣の扱いに長けているっていう意味だよ」

しかも明久の成績はDクラス並だしね、と付け足す。

その答えにFクラスの生徒たちは感嘆を漏らす。

これは本当に勝てるかもしれない…、と。

そして雄二は皆を奮い立たせる為に声を荒げれる。

「よしお前ら！ 俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したい。皆、この境遇は大いに不満だろう！？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー…」

雄二の声にFクラスは盛り上がり、皆は叫び、腕を振り上げていた。姫路は周りの空気についていこうとしているのか、微かに声を出し、微かに腕を振り上げた。

その微笑ましい姫路の様子に、明久と金城は微かに笑った。

「よし、誰かにDクラスへの死者になってもらいたい。逝ってもいいという奴は拳手をしてくれ」

明久は少し字が違うように感じたがツツコミはしない。

誰も手を上げないのならば、明久が手を上げようとした瞬間、近くで手を上げる者がいた。

「誰も行かないのなら仕方がない。僕が行ってあげよう」

自然に手を上げ、自然に立ち上がった人巻は、自然に言葉を発した。全てを余りにも自然に、自然過ぎて寒気を感じる程自然に行った彼は、自然に教室から出ようとする。

そんな人巻に皆啞然としていたが、明久は人巻一人では危ないこととさに判断し、雄二に自分も行くことを告げ、人巻の後について行

った。

「おや明久ちゃん、君も来るのかい？」

「まあね。人巻一人じゃ危ないし」

「相変わらず優しいね。僕から君への愛は変わらずってところかな？」

「男からの愛なんていらないよ……」

「空の愛！？そんなことないぜ！　僕から明久ちゃんへの愛は、気持ちで満たされているよ！！」

「気持ち悪い！」

「気持ち悪いじゃなくてキモいって言うてくれたら、『何？　気持ちが良いの？　どこが良いんだ、この変態！！』って罵ってあげたのに」

「全然嬉しくないよ！！！」

余りにもルーズな人巻に明久は不安になる。

下位クラスからの宣戦布告というのは危険なのだ。少しかり武道の心得がある明久でも無事でいられるか分からないのに、人巻は大丈夫だろうか。だが、それをすぐに思い返す。

特に体格が良いわけでもない人巻だが、実は喧嘩慣れしている。当然だろう、性格が性格だ。人を見たらからかわずにはいられないような人間が、喧嘩慣れしていないわけがない。

明久と人巻は、既にDクラスの前にいた。

何故入らないのかと言うと……

「なんでだ！　なんでなんだ明久ちゃん！　僕が先に入って危険を引き受けてやるというのに！！」

「だって人巻は絶対に喧嘩売るでしょ！？　そんな人に任せられないい！！！」

「この分からず屋!!」
「どつちが!!」

明久は思う。このやり取り、何度目だろう、と。
最終的に、じゃんけんで勝った人巻から先に入ることになった。
そして明久は思う。もしかしたら人巻は僕の思いに感化されて、全
てを穏便に済ましてくれるかもしれない。
人巻は言葉を扱うことに長けている。故に相手を煽ることも一流に
なってしまうのだが。

明久の期待を背に人巻は戸を開けた。

「ご機嫌よう! Dクラスもといダメクラスの皆様!」
「僕の希望をへし折るところか粉々にするんじゃない!」
「うお! 明久ちゃん口調が変わってるぜ!」
「うるせえ! そりゃあ口調も変わるさ! Dクラスの人なんてず
っこけてるじゃねえか!」
「だからダメクラスって言われるんだよDクラス」
「ねえ! なんでDクラスにはそんなに強く当たるの!」
「坊やだからさ」
「それで全てが許されると思うな!!」

いつも通りの会話(漫才)をする二人にDクラスの人間が声をかけ
る。

「えーっと…君たち何しに来たの…?」

その言葉に我に帰った二人は、同時にDクラスの生徒たちに向かい
告げる。

『僕たちFクラスは、Dクラスに宣戦布告します!!』

二人は戦いの火蓋を切った。

明久と人巻と宣戦布告（後書き）

携帯使いにくい…

島田と金城と屋上（前書き）

御伏四さん、とーやさん、感想ありがとうございます！

睡魔が容赦なく襲ってくる中書いた為、おかしい部分が多々あると思います。

見つけ次第、連絡お願いします。

島田と金城と屋上

明久と人巻にとつての戦争は既に始まっていた。宣戦布告と同時に、Dクラスの生徒たちが明久たちに対し、狂気を放ちながら凶器を振り回し始めたのだ。

「おいおいヤバいぜ！ 誰だよこんなの持ってきたの！！」

「人巻！ いつもの余裕はどうしたの！？ 早くどうにかしてよ！」

「こんなバーサーカー共相手に、まーさーかー何か出来ると思ってるのか！」

「いつものキレはどうしたの！？ センスが酷すぎるよ！」

「うるせえ！！」

明久たちはお互いに文句を言い合いながら、右へ左へと体を傾け、時にはしゃがみ、時には飛び跳ね、必死に避けていた。埒が明かないと思ったのか、明久は試召戦争の時間だけ伝え、Dクラスは飛び出す。それに続いて人巻も飛び出し、二人はDクラスを後にした。

「おお！ 二人共無事だったか！！」

雄二は思わず安堵の声を漏らした。雄二の声に明久と人巻は苦笑いを返す。

「わしも心配したぞ…随分と時間がかかったんじゃない？」

「……何かあったか？」

秀吉とムツツリー二も心配していたのか、二人に質問を投げかける。

「おお！ 長らく出番が無かった秀吉ちゃんに康太ちゃん！」

「放っておいて欲しいのじゃ……」

静かに歩み寄ってきた金城が明久に声をかける。

「何か危ない目に合わなかった……？」

「金城もそんなに心配しなくて大丈夫だよ。秀吉もムツツリー二も」

「そうだよ。僕たちは雄二程では無いにしろ、かなり頑丈な方なんだぜ」

「分かってるよ！」

「金城さんの次のセリフは『それでも心配なんだよ！』だ！」

「それでも心配なんだよ！——ハッ！」

人巻の予言通りに話してしまい、金城は思わず驚く。

「バアア——ン——！」

「口で効果音を付けなくて良いから……」

いつも通り奇行をする人巻。それに呆れながらもツツコむ明久。

「のう雄二。人巻が言ったネタがなんだか分かるかの？」

「ああ、あれはジョジョの奇妙な冒険って漫画のネタだよ」

「ふむ、今度貸してくれぬか」

「ああ悪い……俺は売っちまったんだ。ムツツリー二も持ってた筈だぞ」

「ムツツリー二はまだ持っているかの？」

「……今度貸す」

「感謝するのじゃ」

人巻が言ったネタに秀吉が反応し、雄二とムツツリー二と共に雑談

を始めた。

とてもありふれた光景だ。

そんな賑やかな輪の中に姫路が笑いながら入っていく。
勿論、明久たちは歓迎する。

しかし、その輪の中に入らず、ただひたすら睨み続ける島田の姿がそこにはあった。

「よし、お前らミーティングに行くぞ」

「え？ どこに行くの？」

「屋上だ。明久、試召戦争の時間はちゃんと言ってきたな？」

「うん、言ってきたよ。ということはミーティングと昼食を同時進行かな？」

明久の問いに雄二は頷く。そして、こちらを睨みながら立ち尽くしている島田に声をかける。

「おい島田。今から屋上で飯を食うんだが、お前もどうだ？」

その誘いに、島田は内心とても喜んでいた。

何せ想い人と一緒に昼食をとることが出来るのだ。

女性なのに、いつも明久と共にいる自分の嫌いな人物もいるが、背に物は変えられない。

島田は即座に頷いた。

しかし、その瞬間金城の顔が曇った。

大事な友人である明久に対しすぐに暴力を振るう、あの島田と一緒に昼食に来说うのだ。

金城は顔を曇らせたまま、雄二に言葉をかけた。

「私は、いいや…」

後でどんな作戦が教えて…」

それを告げると同時に金城は教室を出て行く。

その言葉に雄二はまだ早かったかと後悔した。

雄二は、クラスの代表として、そして友人として、二人にあまり険悪な仲であつて欲しくなかった為、強行手段に出たのだがそれは失敗に終わった。

そんな雄二とは裏腹に島田は歓喜した。好きな相手と昼食を食べられる上、いつも好きな人と共にいる嫌いな相手が消えたのだ。

そして島田は思う。これで吉井と一緒にいる時間を誰にも邪魔されないだろうと。

「はあ… 明久ちゃん、ガキ臭いと思わないかい？」

「あはは… しょうがないよ、多分僕の所為だし…」

人巻は明久の目を見る。その後明久に微笑みかける。

「金城さんのところに行きたいんだろ？ なら行くべきだよ」

「人巻…」

明久は感心する。何故人巻はこうも人の心が分かるのだろうと。

そして明久は人巻の言葉に背中を押され、雄二に金城のところに行くことを告げ、教室を出て走っていく。

「金城さんがどこに行つたか分かるんでしょうか…」

姫路の言葉に秀吉は微笑みながら答える。

「あの二人は大丈夫じゃ。いつも一緒におるからのう」

秀吉の言葉にムツツリー二も頷く。

秀吉たちは本当にあの二人なら大丈夫だと思っっているのだろう。周りから見ても分かる程、信頼し合っている二人、まあ金城にだが、姫路は少しばかり嫉妬した。

島田は明久が出て行った戸を眺めたまま、呆然と立っていた。

そしてまた怒りが湧き上がってくる。金城を追いかけた明久に、そしてそこまで想われている金城に。

「なんで…なんで金城ばかり…!!」

島田の憎しみのこもった呟きは、幸か不幸か誰の耳にも入らなかった。

今明久が立っているのは、今は既に使われていない空き教室だ。

不気味な雰囲気醸し出している所為か、人が殆ど近寄らない場所である。それと同時に金城が一人でいたい時に、良く来る場所である。それを知っているのは本人と明久だけだ。

「ふう…やっぱりここにいたんだ」

金城は後ろからかけられた声に振り向く。

「別に来なくても良かったのに…」

勿論そんなことは思っていない。金城はずっと明久を待ち続けている。その証拠に、金城は弁当に一切手をつけていない。

恐らく、明久が来なくてもずっと待ち続けていただろう。

明久は勿論気付いていたが、そのことは話さない。

「ごめんね…いきなり出てきちゃって…」

「仕方がないよ。でも島田さんには無理だとしても、雄二には謝りなよ？」

「うん…分かってる…」

その言葉に明久は微笑む。

そんな明久に金城は思う。やはり吉井は信頼出来ると。

金城にとって明久が来るかどうかは五分五分だった。

それでも待ち続けた。明久が金城の元に来れば、明久は島田に暴力を振るわれなくて済み、金城は島田と一緒に昼食をとらなくて済むからだ。

しかし、明久は言う。

「金城、雄二たちのところに行こう？」

その言葉に金城は呆然とし、「何故？」と問いかける。

その言葉に返ってきた答えは至ってシンプル、しかしとても明久らしい答えだった。

「だって皆で食べた方が美味しいし！」

その答えに金城は思わず笑ってしまう。しかし何故か納得した。吉井が言うならそうなんだろうな、と。

そして、金城は精一杯の笑顔で頷いた。

明久は屋上の戸を開き、皆声をかける。

そして明久と金城は皆を見て驚いた。

誰一人として昼食を食べていないのだ。

二人が何故驚いているのか気付いた雄二がそっぽを向き、そして口を開く。

「ミーティングに集中してたからな」

そんな雄二に人巻はいつも以上にニヤニヤしながら言葉を返す。

「男のツンデレは流行らないぜ」

その言葉をきっかけに、二人は言い争いを始めたので明久たちはどんな話をしていたか秀吉に尋ねることにした。

「ねえ秀吉、どんな話をしてたの？」

「うむ、何故最初がEクラスではなくDクラスなのかという話じゃ」

「へえ、どうして？」

「雄二が言うには、Eクラスには絶対に勝てるらしいのじゃ」

「うん、まあ姫路さんも坂本も端梨もいるしね」

「だから、まずは絶対に勝てるとは限らないというDクラスから攻めるらしいのじゃ」

「多分雄二のことだから、Dクラスの設備を取らない代わりに、何か別のことをするのかな？」

「そこまでは言っていなかったので確信は出来んが、大方当たりじゃろうな」

そこに、不毛な言い争いを終えたらしい雄二が来た。

「ああ、そうだ。よく分かったな」

その言葉に二人は笑い、そして言う「バカにするな」と。
そこで金城が言い忘れていたことを思い出し、雄二に言う。

「ごめんなさい!!」

「ん？ なんのことだ？」

雄二はとぼける。しかしその言葉に、金城は少なからず救われた。

そこに、先程までと変わらず不機嫌そうな島田が口を挟む。

「でも本当にDクラス、ましてやAクラスに勝てるの？」

しかし雄二はその言葉に自信に溢れた笑みを返す。

「安心しろ。俺たちのクラスは、最強だ!!」

その言葉にそこにいたメンバーは各々の反応を示した。

そしてそこからは平穏な会話。秀吉を除く男性陣が、以外なことに料理が上手なこと。

それに対抗意識を燃やした姫路が、明日は全員分の弁当を作ってくれるということ。

たわいもない会話だが、とても微笑ましく、とても和やかな、平和な会話。

しかし試召戦争は、もう間近だ。

島田と金城と屋上（後書き）

感想とは本当に嬉しいものですね！
出来れば感想をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2045y/>

バカと真面目と召喚獣

2011年11月24日03時45分発行